

# 持続可能な社会形成に役立つ日本の伝統的知恵

事務局

10月21日、さわやかな秋晴れの午後、中央大学駿河台記念館（千代田区神田駿河台）において、当会の全国交流大会が開催された。今回のシンポジウムは「日本の持続性の知恵を、持続可能な社会形成にどう活かせるか」というテーマで行われた。これは三井物産環境基金の助成を受けて、環境文明21が3年にわたり分析研究を続けているテーマでもある。

会場では、環境文明21が考える日本の持続性の知恵を説明。その知恵がなぜ社会において軽んじられるようになったのかについて、ディスカッションを行い、さらに6つのグループに分かれて、伝統的知恵を現代の生活に活かしていくにはどうすればいいのかを討議した。会場からは活発にさまざまな意見が出されて、熱気あふれるシンポジウムとなった。

## 環境文明21が考える「日本の持続性の知恵」

- ①モノへの執着より精神の豊かさや心の平安を重視していた
- ②自然と同化し、自然との共生の精神を基盤にしていた
- ③足るを知る、自足の心を持っていた
- ④輪廻、循環思想が根付いていた
- ⑤調和を大切にし、家や地域などの集団の存続を重視していた
- ⑥精神の自由を尊ぶ気風があった
- ⑦先祖崇拝や先人を大切にする事で命や暮らしをつないでいた
- ⑧教育の価値を認め、次世代を愛し育てることに熱心だった

## 日本の伝統的知恵を世界に活かそう

加藤三郎（環境文明21共同代表）

環境文明21が誕生し、今年で15年目を迎える。この間、日本を持続可能な社会にするにはどうすればいいのかと考えながら活動してきた。

今回、廃れつつある日本の伝統的な知恵を、21世紀の持続可能な社会へ転用し、それを世界に広めようと思うに至った三つのきっかけがあった。

まず一つ目は、日本の環境技術については、外国の専門家はよく知っているにもかかわらず、日本の環境思想については、まったく質問されたこともないし、興味をもたれなかった。

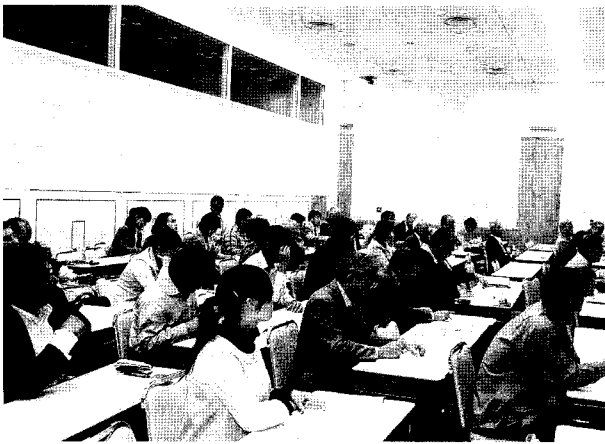
日本の環境技術が生まれた背景にある環境思想について、世界が無関心だということは非常に残念だという思いがあった。

二つ目は、日本の環境研究者ですら、もっぱら

欧米の学者や思想家を引用しながら論文を書いて、日本についての関心を示さないという傾向があるということ。

日本には、日本の持続性に繋がる独自の思想があり、江戸時代のように持続可能な社会を維持し





た文化や風土に根ざし伝えられてきたにもかかわらず、独自のすばらしい思想が埋もれ、忘れ去られようとしている。これを、今一度掘り起こす必要があると考えた。

三つ目は、地球温暖化の影響が深刻化し、世界が価値観のアイデンティティを求めている中、日本人の伝統的知恵が大きく寄与することが出来るのではないかという確信が深まってきた。

こうした調査研究を進めるに当たって、三井物産環境基金により、資金面の援助が受けられたことも大きな理由である。

わたしたちは、ただ日本の伝統的知恵を掘り起こすのみでなく、これらを未来に活かしていく方法も合わせて調査研究し、時代に合う活かし方を探っていきたいと思う。

### 江戸時代の伝統的知恵に焦点を当てて

藤村コノエ（環境文明21共同代表）

持続可能性について、多くの西洋人が様々な場で述べてきているが、日本の伝統的文化の中にも、持続性の知恵を見ることが出来る。

2004年にノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイさんが発信して話題になった「もったいない」精神も、日本人が昔から受け継いできたものである。

こういう日本の伝統的知恵が活かされ、独特の持続可能な社会を長期にわたって実現していたのが江戸時代。平和で質の高い文化を持ちながら、鎖国という半ば閉鎖された社会で持続可能な社会を形成していたという歴史がある。それまで積み重ねられた日本固有の伝統的知恵が人々の精神的

な支柱となり、世界史的にも極めて珍しい社会が実現していた。これは、世界に誇れる実例ではないかと考えられる。

しかし、戦後にはそれまでの価値観が否定され、日本の伝統的知恵は風化の一途を辿ってきた。

同じく閉鎖された世界である地球で引き起こされている温暖化が大きな問題になっている昨今、この江戸時代の知恵に特に焦点をあて、21世紀の世界の国々を持続性のある社会へと導くためのヒントを見つけていきたいと思う。

また、同時にこうした日本の伝統的知恵のアイデアを、外国の人々に上手く伝えていく方法も工夫し、世界に向けて日本の伝統的知恵を発信していきたいと思う。

### ディスカッション

「日本の持続性の知恵は、なぜ軽んじられ、見失われていったか」という原因を考えてみた。

環境文明21からは、①敗戦の結果、戦前の日本的な価値の多くが「古い」とみなされ、否定された、②アメリカの消費文明が輝いて見え、生産し消費する経済価値に魅了された、③戦後、親が子に、自信を持って日本の伝統的知恵を伝えられなくなった、④外国人にも理解できるような科学的な説明がなされていなかった、⑤都市化と共に地域共同体が崩壊し、バブル経済の崩壊後は社会共同意識が希薄化し、社会全体のモラルの規範が維持できなくなった、⑥「社会科学」イデオロギー論争の中で、日本の知恵の出番がなかった、の6つの理由を提示した。

これを受け、会場からいくつもの発言があった。  
\*日本には、言葉にしない「暗黙知」というものがある。しかし、これでは外国には理解してもらえない。何でも論理的に説明できる「形式知」にすることが大切。

\*戦後の日本は、それまでの家中心から企業中心へ変わってしまった。豊かになるためにどんどん家庭から離れてしまった。

\*江戸時代はどういう時代だったかを考えると、しっかりと統治者がいて、ああいう社会が成立していたという状況がある。現代は同じ状況ではない。

\*環境文明21の提案や説明も、隔靴搔痒のところがある。これらの中で、現代に合うどの知恵を残すのかということも考えなくてはいけない。

\*家族制度が崩壊してきているが、これまでのような血の繋がりの親子ではなく、親の世代から子の世代に伝えるという、拡張的な考え方が必要なのではないか。

\*世界全体が有限だとわかってきた今、限られた惑星の中で、コミュニケーション力を持って地球全体を統括するつもりでやらなければいけない。

日本人はやれる国民だ。

## グループ討議



ディスカッションを受けて、会場を6つのグループに分け、これらの知恵をどう活かしていくかについて、グループ討議を行った。1時間に渡る白熱した議論の内容をグループごとにまとめてみた。

### ●第1グループ

日本の伝統的知恵を世代間でどう伝えるかも大事だが、外国への伝え方が難しい。外国では、言いたいことはちゃんと言葉にして伝えないとわかってもらえない。外国へ伝えるためには、西洋の論理に乗せて打ち出すという方法もある。

日本人は日本のことを知らなさ過ぎる。日本のいいところは自信を持って主張すべき。発信する伝統的知恵の良さを理解して、独自の価値観を身につけなければいけない。

それにはやはり教育が大事。今の子供は日本語

でも日本のことをうまく伝えられない。子供のレベルが下がっているのは、今の教育のせいだ。形になっているものは残すことが出来るけれど、伝えづらいのは心や文化。目に見えない、大切なものをどう伝えるかが今後の課題。

また、外国というと西洋と日本を比べがちだが、日本の文化は中韓の影響が大きい。共通項も見つけられるはず。まず、東洋での位置づけを把握することも大切なのではないか。

### ●第2グループ

日本の持続性の知恵は、どのようにすれば真の力を発揮できるのか。「伝える・再生する」という問題について、企業・職場の面から考えてみたい。

世の中には様々なスローガンが流れているが、利益を追求する目的を有する企業にとって、これらの知恵は企業の目的と反する概念であることが多く、なかなか実行までは結びつかない。やはり、ボランティアや植林、清掃活動などの実体験を通じて理解することが出来るのだと思う。会社内の理念のトップダウンではなく、個人の体験による意識改革が大事だろう。

農業においても同じ。小学校でも農作業が必須化され始めている。体験して知ることで、持続させる力が出てくる。

昔は道徳的だった秩序が、今は法的なものに変化している。企業理念の中に、こうした伝統的知恵を取り入れて、その規範にのっとって経営を行うのが理想だろう。

### ●第3グループ

伝統的知恵が廃れてしまったのには、時代による価値観の変化があげられる。例えば、父親が偉くて、次が長男というような「家」のシステムが崩壊してしまっている。社会の一番小さなユニットである「家」の形が変わってしまい、家庭の中でも断層が出来ている。ひいては、地域のつながりも希薄なものとなってしまった。

一方で、昔は農家の人たちが伝承してきたお神楽を、農家の人がいなくなった今、地域の人が代わりに伝承し、独自の文化を守っている所がある。

また、いったん絶滅してしまったコウノトリを



復活させ、コウノトリの住める町にしようという目的で、住民が一丸となって成功させた町もある。

上記の場合は、自然との共生、伝統文化の伝承などを上手く地域社会との協力で実現している。こうした日本の伝統的な知恵を、実際、会社や家庭、地域社会にどう活かすのか。何をしたらいいのかという場合には、いい実例を示すのが一番わかりやすいと思う。

みんなに伝えるためには、例えばお神楽であるとか、コウノトリであるとか、何か仕掛けがあるほうが、伝わりやすい。うまくこうしたものを使いながら、伝統的知恵を今に活かしていく工夫が大切だ。

#### ●第4グループ

日本の知恵の精神性を伝えることが必要。伝えるべき知恵の整理が必要だし、上手く伝える方法も考えなくてはいけない。

親から子へ、子から孫へと伝わってきたものが、今は、ほとんどが核家族となり、それが難しくなっている。昔は、地域社会で子どもは育てていたが、今はそういう意識も希薄になった。

コミュニケーションのツールも違う。今はパソコンや携帯電話が主流。人対人のコミュニケーションは希薄になっている。

欧米のよりどころは神だが、日本の場合、戦後家長制度が崩れ、完全によりどころを失った。学校のPTAの集まりに出かけて感じるのは、親子の会話の決定的な不足。家庭力が圧倒的に小さい。共働きの多い今、子どもにかかわる時間を持つことが難しい。子どもを育てる環境を経済社会が作

っていかなければいけない。

日本の知恵を企業のコンプライアンスに入れてはどうか。企業活動だけでなく、地域活動、子どもと、それぞれにあわせた翻訳活動が必要だ。

#### ●第5グループ

日本の各地に埋もれているいいものがある。それに地域の人たちは気がついていないことが多い。むしろ、外国の人たちのほうが価値に気がついてることが多い。日本の知恵も同じ。各地にあっても、紹介しきれないのが今の状況だ。

昔と今では価値観がまったく違っている。戦争に負けたからではなく、消費文明が原因なのではないか。生活の格差もどんどん広がっている。競争社会では、人とお金を入れることばかりに力を入れてしまう。

物質と結びつかない、精神的経済発展が可能だろうか。「心豊かに暮らしていく」とは「気持ちよく暮らしていく」こと。8つの日本の伝統的知恵はそのまま現代に活かさない。この8つからヒントを得て、伝えたいことを、どんな世代にも分りやすい言葉にしていけないといけない。

効率的な社会にある中で、忙しさを感じている人が、いかにこれらの知恵を実践していくかが重要。意識を改革することが必要だ。

#### ●第6グループ

日本の知恵を残すことは大事だが、その前に50年後、100年後にどういう社会を作るのかというビジョンを明確にすることが大切。

伝統的知恵の8つの提言はいいことを言っているが、抽象的で説得力に欠ける。この「日本の知恵」と「科学的知見」をセットにし、現代に置き換えた提言をするべきだ。また、価値観の同じグループでコミュニティーを作って、大きな力で活動していくことも必要。NPOの横の連携強化も望まれている。

来年は洞爺湖サミットが開催される。資源の枯渇、異常気象、自然災害の恐怖など、地球環境は危機的状況にある。日本は危機感と問題意識をもって望まなければいけない。

日本が世界のトップランナーとして誇れるものは「技術」。「技術」と「道徳」の両方を活かし、未来志向で世界に発信していきたい。